
霧降る国の戦記

むーむー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧降る国の戦記

【Nコード】

N3659F

【作者名】

むーむー

【あらすじ】

ミンスティア
霧降る国を舞台に、繰り広げられる、異世界の戦記。

第一章 砂塵の誓い 第一節（前書き）

更新は、遅いかもしれませんが、よろしければ、お付き合い下さい。

第一章 砂塵の誓い 第一節

空高く、砂塵が舞い上がった。

二ム平原を南北に貫いて走る街道を、一台の荷馬車と十騎の馬群が、馬蹄の響きと共に、北へ向かつて駆け抜けていく。

身を切るような風が、隊の殿を務める、アルフォンスの頬を叩いた。大陸の南部地方とはいえ、春の訪れはまだ遠く、吹く風は冷たかった。

アルフォンスは馬上で、外套の裾を寄せた。隊の進む速度はさほど速いものではなかったが、隙間から入り込む冷気は、やはり身にこたえる。

「思った通り退屈だな、兄貴」

共に殿を務めていた、リヴェリーが馬を寄せながら言った。

兄とは呼ぶものの、アルフォンスとリヴェリーには血の繋がりは無く、二人が旅をするようになってからの習慣であった。

リヴェリーもまた手綱を握る両の手に息を吹きかけ、寒さを堪えていた。

「まあな」

曖昧に頷くと、アルフォンスは、自分達に声をかけてきた男のことを思い浮かべた。

アルフォンスとリヴェリーは、士官先を求める気ままな旅の途中であった。

二人は旅先で立ち寄った、とある街の酒場で、仕事の誘いを受けた。

アルフォンスとリヴェリーに声をかけた男は、自らをアリアディエールと名乗った。

荷を運ぶ仕事だが、賊の出るという街道を通るので、護衛として腕の立つものを探しているという。

アルフォンスは、何故自分達に声をかけたのか、目の前の男に問うてみた。

「十人までは、人を使つていいと依頼主に言われています。あと二人必要なのですが、私が見たところ、あなた達二人が、この酒場の中で一番腕が立ちそうだったので、声をかけたのです」

アリアディエールは明快に答えた。

確かに、アルフォンスとリヴェリーは、共に持つべき主君も持たず、無位無官の身ではあるが、武芸に些かの自信はあった。

さしあたり、食い詰めているということもなく、退屈そうな仕事であつたから、即座に断つても良かった。だが、アルフォンスがそうしなかつたのは、仕事の内容よりも、自分達に声をかけてきた男に興味が沸いたからだ。

年格好は二十歳に届くかどうか。精悍な顔つきの中にも、微かな幼さの残つた表情。磨き上げた黒曜石のような双眸が、一際強く印象に残つた。

人を惹きつける、いい目をしている。

目の前の男から、何かを感じ取つたアルフォンスの内に、この男の器量がどれほどのものか、見極めてやろうという思いが湧き上がってきた。

詳しく仕事の内容を尋ね、アルフォンスが、仕事を手伝うことを告げると、アリアディエールは人懐っこい笑顔で応えた。

「やつぱり、付き合うんじゃないかな」

「まあ、そう言うな。仕事が済めば美味い飯にもありつける」

「いつそのこと、賊でも出れば、思い切り暴れられるんだがなあ。冷えた身体も温められるし」

リヴェリーはそう言うのと、わざとらしく、腰から下げた、長剣の鍔もとを鳴らしてみせる。

「賊など出ないに越したことはないだろう、違うか？」

「でもなあ」

リヴェリーは頭を掻いた。

一般論でたしなめてはみたものの、アルフォンスもリヴェリーと似たような事を考えていた。このまま、順調に仕事が終われば、アリディエールという男の器量も計れずじまいになってしまう。それでは、仕事を受けた意味がない。

そんな二人の願いが通じたのか、不意に隊の進む速度が緩やかになり、やがて停止した。

「何か妙な雰囲気だな」

口の端を釣り上げながら、リヴェリーは言った。もめ事ならば、むしろ望む所と言わんばかりにも聞こえる。

アルフォンスは苦笑したが、笑ってばかりもいらなかった。

「様子を見に行くぞ」

アルフォンスとリヴェリーは馬腹を蹴ると、荷馬車に向かって駆けた。

先頭では、荷馬車を取り囲むように、八騎の男達が道を塞いでいた。

御者台の上に立ち上がって、男達と向かい合っていたのは、アリディエールただ一人であった。

「あいつら、雇われた奴らじゃねえのか？ 何してるんだ」

アルフォンスは声をかけようとしたリヴェリーを制する。

「待て。少し様子を伺うとしよう」

街道の中央で、男達は無言の睨み合いを続けていた。沈黙を破ったのはアリディエールの方だった。

「どういっつもりだ、お前達」

「分け前をよこしな」

八騎の先頭に立つ男が言った。

「街へついたら、約束通り金は払う」

「そんな端金じゃねえ。馬車の中には、まだ金貨がたんまりとあるじゃねえか。それを分けようと言っているんだ」

「お前達は、人の金に手をつけるつもりか？」

アリアディエールの返答は、冷やかなものだっ

「別に俺達だけじゃねえ。皆で分けりや文句はねえだろ」

数を頼みにしているのか、八騎の男達は皆一様に裏笑いを浮かべている。この男達はどうか、初めから金を掠めとる気だったようだ。とにかく、私にその気はない。日暮れまでに、街へつかねばならないんだ。ついてくるなら、金は払う。そうでないならここから去れ」

アリアディエールがそう言い放つと、八騎は荷馬車を取り囲む輪を狭めた。

「去れとはどういうことだ？」

「言葉通りの意味だ。お前達が賊の真似事をするならば、私はそれに付き合うつもりはない」

「おい、そんなことを言つて、はじめから金を独り占めするきだったんだろ、え」

男達は下卑た笑いを口元にへばりつかせながら、腰から下げた、護身用の山刀の柄に手をかける。

「お前達は約を違えて、信義を汚す気か」

男達は一瞬、呆けたような顔になり、その後哄笑が響き渡った。

「こんな時代に信義だと？ 笑わせる」

男達の嘲りに、アリアディエールは拳を握りしめて耐えていた。

「私に、人を見る目が無かったようだ」

諦めにも似た口調で、アリアディエールは呟いた。

「どうするんだ？ 俺達と金を山分けにするか、お前が荷を置いて、ここから逃げ出すか、二つに一つだ」

中央の男が、アリアディエールに近付こうとした次の瞬間、アリアディエールは、握りしめていた鞭を水平に振り抜く。

不意に横面を殴りつけられて、男は馬上からたたき落とされた。

「もういい、お前達とはここでお別れだ。そこを退け！」

アリアディエールは、鞭の先端を男達に突きつけた。

突然のアリアディエールの行為に、周囲の空気が、一気に張り詰

めたものに変わった。

「何をしゃがる」

馬上から落ち、大地と望まぬ接吻を強要された男が、ようやく立ち上がる。

馬上の男達が一斉に、腰に下げた山刀を抜きはなつた。

アルフォンスとリヴェリーの二人も、剣呑な雰囲気、見物を決め込んでいる訳にはいかなかった。

「丸腰の者を相手に、そんな物騒な物を持ち出すのは穏やかではないな」

全員の視線が、アルフォンスとリヴェリーに集まつた。一触即発の雰囲気も、意に介さず、二人はアリアディエールの傍へ馬を寄せた。「さつきから話は聞いていたが、理はこちら側にあるのではないか」二人の偉丈夫が相手の味方についたことで、男達は少し気圧されたようだった。

「さてよ、あんたらだって分け前は多い方がいいに決まってるだろうが」

「だからといって盗賊紛いのことができるか」

リヴェリーは敢えて挑発的に言ってみせた。

「こんな時代だ。金のあるところから奪って何が悪い」

開き直つたように、男は言つた。

「時代か」

アルフォンスは鼻で笑う。

「お前達は自分達の行為を、時代のせいに行っているだけではないか」アルフォンスの言葉に、男達は何も言えなくなった。

「そういう訳だ。おとなしく、道を空けてついてくるか、お前達がここから去るか、二つに一つだ」

リヴェリーは盗用混じりに言つと、にやりと笑みを浮かべた。

「もうすぐ仲間達が、ここに来る。そうすれば、お前達もただでは済まんぞ」

「賊を手引きしたのか」

アルフォンスは声を低めて言った。

「ならば、話は早い。お前達を切ったとしても、心は痛まぬからな」
交渉決裂だった。

アルフォンスとリヴェリーの傍にいた二騎が切りかかる。

四騎が交錯した。

アルフォンスとリヴェリーは馬上から、強烈な抜き打ちを放つ。

鋭い剣閃が、二条の雷光を描き、二つの首が宙に舞った。

「後付けになってしまったが、アリアディエール殿、よろしいか？」

アルフォンスは、悪戯っぽい笑顔をむけながら言った。

「構わない。責任は私が取る」

「人を見る目はあるよ、あんたは。俺達が保証する」

リヴェリーは嬉しそうに続いた。

三人対六人の斬り合いになった。

アルフォンスとリヴェリーは、左右に分かれて、馬上の男達に、勢い良く切り込む。二人が剣を振るう度に、道端の草でも打ち払うように、男達が切り倒される。圧倒的な力量の差であった。

アリアディエールは、自らが馬から叩き落とした男に、飛びかかっていった。

二人はもみ合ったまま、地面の上を転がっていった。男が、アリアディエールに馬乗りになった。

「殺してやる」

男の目は殺気に満ちていた。

山刀を逆手に持つと、切っ先をアリアディエールの喉元へ目掛けて、突き降ろした。

すんでのところで、男の手首をアリアディエールが掴む。じりじりと剣先が喉元に近づく。アリアディエールは、頭を逸らして、剣先をかわすと、反動で男を蹴りはがした。

アリアディエールは立ち上がると、傍らに落ちた山刀を拾い上げた。
た。

「待て、命だけは」

形勢は逆転し、男は見苦しく命乞いを始めた。

アリアディエールは男を一瞥しただけで、何も言わなかった。手にした山刀を上段に構えると、ためらいなく、男の肩口から斜めに切り下げた。

返り血は、思ったよりも少なかった。

アリアディエールは、顔にかかった血を拭う。

「終わったか」

「どうやら、そうもいかないようだ」

アルフォンスとリヴェリーが、アリアディエールに近寄りながら言った。

アルフォンスが南の方角を指差した。

砂煙が、舞い上がっていた。

「恐らく、こいつらの仲間であろう。足止めを食わせておいて、襲うつもりだったのだろう」

「どうする？ 兄貴」

アルフォンスは無言で、アリアディエールの顔を見つめた。

「もう一働き願えますか？」

アリアディエールは、少し迷ったように言った。

アルフォンスは、その一言で、アリアディエールが、何を言おうとしているのかを理解した。

荷馬車の速度に合わせて逃げたのでは、いずれ追いつかれてしまう。誰かが賊の足止めをする必要がある。

荷を守るためには、正しい判断だった。

「承った。任せて頂きたい」

破顔一笑、アルフォンスは答えた。

「ちょうど、暴れ足りなかったところだしな」

リヴェリーも調子を合わせる。

「恩に着ます。荷を届けたら、すぐに私も戻って来ます」

「なあに、あの程度の賊になど、やられはせんよ」

「あんたが戻って来る前に、片付けておくさ」

「わかりました」

アリアディエールは、荷馬車に飛び乗ると、馬に鞭をいれて、街道を北へ向かって駆け出した。

砂煙は更に濃くなり、賊の姿がはっきりと捉えられた。

「二十人位か？」

「久しぶりに腕がなるね」

アルフォンスとリヴェリーに、臆する所はなかった。

先頭の数騎が、弓をつがえ始めた。

「では、もう一働きといくか」

「了解」

アルフォンスとリヴェリーは馬腹を蹴ると、勢い良く賊に向かって駆け出した。

アルフォンスの心は躍った。

（この乱れた世の中に、本気で信義を説く者がいるとはな）

思った以上に、面白い男に出会えた。アルフォンスは、その事に何よりも、満足を覚えていた。

アルフォンスは、飛んで来た二本の矢を、長剣の一振りで払い落とすと、不敵な笑みを浮かべて、剣を構えなおした。

第一章 砂塵の誓い 第二節

夜の帳が空を覆い、宝石箱を投げ打ったかのような、無数の星が姿を現した。

ミスティア南部地方、最大の都市ヴァレンヌ。

ロスタムの豪華な邸宅の広間では、酒宴が催されていた。

賊の手から荷を守り抜いた、アリアディエール達を、労うために開かれたものである。

荷を依頼主のロスタムに届けた後、アリアディエールは、事情を話し、数人の男を率いて、即座に街道をとって返した。

アルフォンスとリヴェリーに再会出来たのは、半刻（約一時間）程経過した頃だった。

「賊は片付けた。捕らえた者も何人かいるので、役所へ引き渡してください」

アルフォンスは事も無げに言った。

アリアディエールは、二人が無事であったことを何より喜んだ。

三人が再びロスタムの邸宅を訪れると、ロスタムは開口一番、詫びの言葉を述べた。賊と繋がっていた男達は、ロスタムが手配した者達だったからだ。

三人は席に着くや否や、空腹は最良の調味料と言わんばかりに、勢い良く食事を始めた。三人とも、派手に体を動かしたのに、昼間から何も食べていなかったのだ。

ロスタムは笑いながらその様子を見ていた。

「お二人はお強いすな。二十人からなる、賊を倒してしまうとは」「大したことはありません。武器を振るうこと以外に、能がないだけのことでござるよ」

アルフォンスは控えめに言った。

「どうです、私の下で働いてみませぬか。部下としてではなく、客将として。並みの将軍よりも、いい暮らしは出来ると思うのですが」

リヴェリーの杯を持つ手が、ぴたりと止まった。心が動いているのかもしれない。

「申し出は有り難いが、しばらくは気ままな旅を続けていたいののでお断り申し上げます。気持ちだけは頂いておきます」

「そうですか。まあ、あまりしつこくは言いますまい。気が変わったら、いつでも来てくだされ」

ロスタムは、二人の武勇伝を聞いたがった。しばらく酒を傾けながらの談笑が続き、半刻（約一時間）程経過した頃だった。

「私は、明日には村へ戻りますので、先に休ませて頂きます」

アリアディエールは、アルフォンス達に黙礼をすると、広間を後にした。

「彼とは、どのような知り合いなのですか」

アルフォンスは、ロスタムに水を向ける。

「彼の父親と、些か縁がございましてな」ロスタムは、すっかりはげ上がった頭をさすりながら言った。

「彼の父上は、もともと軍人でした。私が商売を始めたばかりの頃、この地方の守備隊長として、街にいました。その時に、良くしていただいたのです」

「ほう」

「その後、散発的な戦がございましてな、彼の父上は武勲を立てられ、王都の將軍位についたのです」

ロスタムは、昔を懐かしむように、中空を見上げた。

「高潔な方でした。商人達に、賄賂を要求する事などもなく、民の生活を第一に考えられておりました」

「今も、王都におわすのですか」

「いえ、数年前にお亡くなりになりました。その時には、既に軍を退いておられたようでございます」

「何か理由があつたのですかな」

「詳しくはわかりませぬ。ただ、あの方のような方は、王都でも少数派でございますからな。お父上を疎ましく思う者も中にはいたよ

うです」

ロスタムは、杯に残った葡萄酒を煽り、一息ついた。

「アリアディエル殿は今どちらに住んでいるのですか」

「この街から、すぐ西の小さな村で暮らしております。私としては、彼のような若者に、本格的に仕事を任せたいのですが」

「あなたの下で、いつも仕事をしているのではないのですか」

ロスタムは被りを振った。

「今回の様に、たまに手伝ってもらうくらいですな。何度となく勧めてはいるのですが、思う所があるようで、振られ続けておりますよ」

ロスタムは笑いながら答えた。

「こんな時勢ですからな。信頼できる者も、なかなかには見つかりませぬ。まして、有能な者ならば尚更です」

「それ程までに、世の中は乱れておりますか」

ロスタムによれば、今回のように、仕事を頼んだ者が、賊とつるむのも、珍しい事ではなくなっているそうだ。

「北の地方にも、不穏な噂が流れおりますし」

「と、言う」と

「反乱でございますよ」

ロスタムは声を低めて言った。

「穏やかではないですな」

「あくまでも噂ですが、アルデン又伯領に取り引きに向かった者が、そのような話を耳にしたのです」

「なるほど」

アルフォンスは顎を撫でながら考えこんだ。

もともと、ミステイア北部地方と、中央政府との折り合いは悪く、領地経営の難しい地であると言われてきた。しばしば、農民達が蜂起を起こしたが、散発的で組織されたものではなかったので、騒ぎが大きくなる前に鎮圧されていた。その度に国王は、北部への締め付けを強化し、それに反発する民が増えてしまう。

どこまでも際限がなかった。

「何が起きても不思議ではないか」

アルフォンスはそう呟いた。

「さて、そろそろお開きにしますかな。連れの方は疲れておいでの様だ」

ロスタムは笑いながら言った。

「おい、起きろ。部屋へ行くぞ」

アルフォンスは、いつの間にか、すっかり眠っていたリヴェリーを小突いて起こした。

翌日、アルフォンスが目覚めた時には既に、館の中にアリアディエールの姿はなかった。朝一番で村へと出発したらしい。

アルフォンスは、ロスタムに挨拶がてら、アリアディエールの居場所を尋ねた。

「アリアディエール殿を訪ねてみようと思うのだが」

「どうしたんだい、急に」

リヴェリーは欠伸混じりに言った。

「彼の内に秘めているものが、何なのか知りたくなった」

アルフォンスはリヴェリーに、ロスタムから聞いた話を聞かせた。

「なるほどね。でもよ、年だって俺達とはそう変わらないんだ。何も考えてないだけかもしれないぜ」

「そうかもしれないな。だが、私はそうでない方に賭けたいのだ」

「まあ、行けばわかるさ」

アルフォンスは黙って頷いた。

わずかな時間ではあったが、アリアディエールという男と行動を共にしてみて、アルフォンスは、言葉にならない思いを感じた。

今まで、士官先を求めて何人もの諸侯や領主を見てきた。だが、いずれもつまらない男達ばかりで、仕える気にはならなかったのだ。どの男達とも違う輝きが、アリアディエールには確かに存在した。

この者ならば或いは。

アルフォンスはそう感じ、アリアディエールと、深く語り合いたいという気になったのだった。

目的の村には一刻（約二時間）程で到着した。村の入り口で、二人は馬から降りた。一番近くに建っていた、粗末な民家でアリアディエールのことを尋ねると、親切に二人を案内してくれた。

案内された家は、二人の想像以上に質素な造りだった。

アルフォンスが戸を叩いて、訪いを告げたが、返事はなかった。

家屋の裏手から乾いた音が聞こえてきた。

アルフォンスとリヴェリーが、裏手へ回ると、木剣を振るうアリアディエールの姿があった。

「アリアディエール殿」

アルフォンスの呼びかけに、アリアディエールは笑顔で応えた。

「やあ、アルフォンス殿にリヴェリー殿ではないですか。どうしたのですか」

アリアディエールは、息を弾ませて言った。

「あなたともつと語り合いたいと思って、訪ねてきたのだ。ご迷惑をおかけしてすまない」

「私も同じように思っていたのですよ。立ち話も何ですから、中へどうぞ」

アリアディエールに案内され、二人は家の中に入った。

「今、お茶を沸かします。そこにかけて下さい」

「お構いなく」

アルフォンスとリヴェリーは、簡素だが、作りのしつかりとした食卓に腰を下ろした。

「書物も読まれるのですか」

アルフォンスは、部屋の端にうず高く積まれた、本の背表紙を見やった。

「父親の遺品です。他にやることもないので、粗方読み終えてしまいました」

「剣の修行もしていたみたいだったけど」リヴェリーは言った。

「そんな大袈裟なものではありません。見よう見まねで、振り回しているだけなのですよ」

「でもよ、八人に囲まれて啖呵を切るなんて真似は、なかなかできないぜ。顔に似合わず、荒っぽいんだな、あんた」

「おい」

アルフォンスがリヴェリーの率直すぎる物言いをたしなめた。

アリアディエールは、二人の話を聞きたがった。酒場で出会うまでに、今まで何をしてきたのか。

アリアディエールの質問に一つ一つ丁寧にアルフォンスは答えた。
「アリアディエール殿、あなたには、心に秘めたものがあるような気がしてならないのだ。良ければ、お聞かせ願いたい」

アルフォンスは意を決したように、切り出した。

「茶が沸いたようです」

アリアディエールは問には答えず、席を立ち上がりかけた。

「アリアディエール殿、私達がここへ来たのは、それを確かめるためなのです」

「確かに私には、夢があります。ですが、人に語って聞かせる類のものではありません」

「もったいぶらないで下さい。私はあなたの目には、何か違うものが映っているような気がしてならない。それをお聞かせ願いたいです」

アルフォンスは思わず立ち上がっていた。隣にいたリヴェリーも目を丸くしている。

アリアディエールは、少しの間黙ったままだった。ふと、思いついたように立ち上がって、奥の部屋へと向かった。

アリアディエールが再び姿を現した時には、一振りの古びた大剣を手にしていた。

「……弱き者を救う剣であれ。この剣と共に、父が残してくれた言葉です」

アルフォンスとリヴェリーは、卓の上に置かれた剣に目を落とした。柄や鞘の部分には、華美な装飾などは一切無かった。

「抜いてみても宜しいか」

アリアディエールは黙って頷いた。

アルフォンスはゆっくりと剣を抜く。古びてはいるが、厚みのある刀身には、まだまだ十分な切れ味があるように見えた。使い手の実直な思いが、剣に込められているように感じた。

「お二人は、今の世の中をどう思われますか？」

「今、国は麻のように乱れてきておりますな」

アルフォンスは鞘に剣を納めながら答えた。

「賊が横行し、財産を奪われた者は、賊になってしまつか、死ぬか、どちらかを選ばざるを得なくなっています」

アリアディエールの言葉に、熱がこもってくる。

「だからといって、役所に願い出ても、役人は何もしません。役人が更に金を要求することも、珍しくないのです」

アリアディエールは、卓上の剣を手にとって言った。

「剣の腕を磨いておけば、少なくとも、刃の届く範囲にいる人は、守れるかもしれません。だが、私にはそれでは足りないのです」

アリアディエールの一言一句が、アルフォンスとリヴェリーに、深く染み込んできた。

「きつと、私は欲が深いのでしょう。なるべく大勢の人々が、笑顔で暮らせるように、世の中を変えていきたい。そのためには、もつと自分の腕を長く伸ばさなければならぬ。出来るだけ長く」

「それはつまり」

アリアディエールの双眸が輝きを増した。

「私は、自分の国を作りたいのです」

アルフォンスとリヴェリーは、二の句が告げなくなった。

「ただの夢です。戯言に聞こえるでしょう。私は、この身一つしか持たないのですから」

アリアディエールは、自嘲のこもった笑顔を見せた。

「馬鹿な事だと、笑ってもらって構いません。でも、だからといって、諦めるつもりありません。私の選んだ道です」

アリアディエールの目は、中空の一点を見つめていた。ここではないどこか、遙か遠くを見据えている。

「同じ道を、共に歩かせてはもらえませぬか？」

反射的にアルフォンスは言っていた。

「なにを馬鹿な、いや失礼致しました」

予想外の反応に、アリアディエールは思わず言っていた。

「あなた達二人ならば、一軍の将として、身を立てる事もできます。よう。それなのに何故」

「あなたの貴い志に、胸を打たれたのです」

「しかし、私には返せるものが何もない」

「先に、夢を与えて下さった。それだけで十分なのです」

アリアディエールは、しばらく考え込む素振りを見せた。

やがて、決意を秘めた目でアルフォンスとリヴェリーを見つめた。「わかりました。では、こうしましょう。我々は主従ではなく、同じ道を歩む同志ということでは、如何です？」

「ありがとうございます」

アルフォンスは深々と頭を下げた。

「お前はどうするんだ」

アルフォンスはリヴェリーに尋ねた。

「おいおい、兄貴は俺だけ仲間外れにするつもりだったのか？一緒に行くさ。つまらない奴の下で働くのは、ごめんだからな」

「別に無理しなくてもいいのだぞ」

冗談めかして、アルフォンスは言った。

「無理なんかしてないって」

二人のやり取りを、アリアディエールは笑顔で見つめていた。

三人の間に、柔らかな空気が流れていった。

第一章 砂塵の誓い 第三節

アルフォンスとリヴェリーは、アリアディエールの家に滞在し、その間、昼間は村の仕事を手伝い、夜には今後の方針を話し合っていた。

「やはり、アリアディエール殿が陣頭に立つべきだ」

「ですが」

アリアディエールは初め、自分が三人の中で、最年少であることを理由に断った。

しかし、アリアディエール達が、今、行動を起こすには三人だけでは、人数が圧倒的に足りないこと。組織を編成する上では、頭が必要であること。自分と、リヴェリーはその器ではないことを強調すると、アルフォンスは再度アリアディエールに勧めた。

「考えようによっては、一番の面倒を押し付けているのですよ」
アルフォンスは笑った。

アリアディエールはアルフォンスの言葉に、ようやく顔を縦に振った。

数日後、アルフォンスとリヴェリーは、アリアディエールの住む村を去り、ヴァレンヌへと戻っていった。

ミステイア北部の情勢について、情報を集めるのが目的だった。

「アリアディエール殿は、北の情勢を気にしているようだな」

「何か起きそうな予感がするしな」

「お前の場合は願望だろう」

二人は再び、ロスタムの邸宅へ向かった。

ロスタムは快く二人を迎え、自分の書斎に案内した。

再開の挨拶もそこそこに、ロスタムは二人に告げた。

「やはり、北で反乱が起きたようです。今、高札が掲げられております。義勇兵を募る様子ですな」

ロスタムは言った。

アルフォンスは、情勢を更に詳しく尋ねた。

「物流が滞っております。今、迂闊に北部の州に迎えば、恐らく戻っては来られないでしょう」

「なるほど。して、反乱の首謀者は判明しているのですか」

「青銀の信徒、と呼ばれる組織を御存知か」

アルフォンスとリヴェリーは被りを振った。

「北部州の農民達の中に、広まってきたている、宗教なのですが、話によると、その信者達が今回の反乱を起こしたのだとか」

アルフォンスは、腕を組んで考えこんだ。

「どのような、教義のですか」

「信者ならば、死後も安らかになれる、という、ありふれたものでございますな」

ロスタムは、皮肉混じりのため息をついた。

ありふれてはいるが、だからこそ急速に信者数が拡大していったとも言える。

「背景には、北部州の鬱積した不満があればこそ。なかなか、人の心を掴むのが、上手いに見える」

アルフォンスは嘆息した。

「中央政府の対応も、後手に回っているようです。義勇兵を募るのが、その証拠でありましょう。即座に鎮圧できなければ」

「更に、国が乱れますな」

アルフォンスの言葉に、ロスタムは頷いた。

「わかりました。お時間を取らせてしまい、申し訳ない」

アルフォンスが頭を下げると、ロスタムは笑って答えた。

「何、気にしないで頂きたい。北部州との取引が少なくなり、時間を持て余しているのですよ」

そこまで言ったロスタムは、急に真剣な表情に変わった。

「やはり、アリアディエル殿は志願なさいますかな」

「ええ、恐らくは。アリアディエル殿は、今回の反乱を見過ごすことはしないでしょう」

「そうですか」

ロスタムは書斎の天井を見上げた。言葉は短いものだったが、思うところがあるようだった。

「あなた方も行動を共にされるのですね」

「そのつもりです」

アルフォンスは迷うことなく答えた。

「私が言うのも変ですが、彼を頼みます」

アルフォンスとリヴェリーは、ロスタムの言葉に頷いた。

ロスタムの邸宅を後にすると、アルフォンスとリヴェリーは、高札の掲げられている、広場に向かった。

ヴァレンヌの街の中央にある広場には、人だかりが出来ていた。人混みを掻き分け、ようやく高札の前にたどりつく。

北部州の反乱に際し、ここに義勇兵を募る。武勲を立てた者には、国王の名において、報酬を約束する。

アルフォンスとリヴェリーは、高札に書かれた内容を見ると、互いに顔を見合わせ、頷き合った。

「これは我らが世に出る契機だな」

「なるほど、武勲を立てればそれだけ夢に近づく訳だ」

アルフォンスとリヴェリーは、馬を飛ばし、アリアディエールの元へと戻った。

その日の夜、三人は北部の反乱について話し合った。

「そこまで、情勢は動いていたのか」

アルフォンスから、報告を受けたアリアディエールは、考えこむように言った。

「恐らく、今回の反乱はすぐには治まらないと思われます。そうなれば、国は乱れ民が苦しむことになりましょう」

「俺達も早いとこ、参加しようぜ」

二人の意見に、アリアディエールは沈黙をもって答えた。

「何か懸念があるのですか？」

アルフォンスが尋ねた。

「確かに、乱は治めねばならない。だが、乱を起こしているのも、また民なのだ」

「残念ではありますが、反乱の首謀者は、青銀の信徒と名乗る集団です。もはや、ここに至つては、賊と変わりはないでしょう」

「確かにその通りだ。だが、私はやりきれないのだ」

アリアディエールは、卓に拳を打ちつけた。

「民の、救いを求める心につけ込み、今回の反乱を起こした者を許してはおけない」

「なればこそ、速やかに乱を鎮めるために立ち上がらねばなりません
まい」

アリアディエールに迷っている暇はなかった。乱に苦しむ民を、救う機会を与えられたのだ。この時に立ち上がらねば、いつ立ち上がる。アリアディエールは沈黙考した。

アリアディエールの心は決まった。

「明日、村の者達に話をしてみようと思う。それに、戦に出るのだ。支度をせねば」

アルフォンスとリヴェリーは、黙って深々と頭を下げた。

翌朝、アリアディエールは、村に一軒だけある鍛冶屋に向かった。形見の大剣を打ち直してもらったためだった。アルフォンスとリヴェリーも、戦に備えて、自らの手足となる、武器を注文する事にした。アルフォンスは、柄の部分まで鉄で作られた長槍を。リヴェリーは、長柄のついた両手持ちの戦斧を注文した。

鍛冶屋の主人は三人の注文を快く受けると、三日後に再び来るように言った。

その日の正午過ぎ、村に役人が現れ、義勇兵を募る高札を立てていった。村人達が何事かと、高札の前に集まっていた。

アリアディエールは、集まった人々に対して、自分の思いを訴え始めた。

「皆の者、聞いてくれ。私は北部で起こった反乱を鎮める為に、義

勇兵として志願しようと思う。もし、私と共に戦ってくれる方がいるのならついてきて欲しい」

アリアディエールの声は、決して大きくはなかった。アリアディエールは、自らの思いを一つ一つ言の葉に乗せて、丁寧に語りかけていった。

「決して強制はしない。私と同じ道を歩んでくれる者がいれば、三日後、またここに来てもらいたい」

アリアディエールはそう締めくくった。

三日後、二十七人の若者達が、思い思いの武具を身に付け、アリアディエールの下に集まっていた。

皆一様に、真剣な表情をしていた。アリアディエールの言葉に共鳴し、集まった男達だった。

アリアディエールは集まった男達に向かって叫んだ。

「私達は同じ道を歩む同志だ。この村に、生きて帰れるとは、約束できない。だが、私達が信じるもの、守りたいと思うもののために、共に戦おう」

集まった男達が、拳を突き上げて、アリアディエールの言葉に応えた。

その時、鍛冶屋に注文した武器を受け取りに行っていた、アルフオンスとリヴェリーが、客人を伴ってアリアディエールの所にやって来た。

「ロスタム殿ではないか」

アリアディエールに向かって、ロスタムは手を振った。

ロスタムは、鞍の置かれた三十頭の馬、糧食、金貨五百枚をアリアディエールのために運んできたのだ。

「戦に行かれるというので、餞別を持って来たのですよ」

「お気持ちはありがたいのですが、受け取れませぬ」

アリアディエールは言った。

「なあと、あなたに差し上げる訳ではありません」

ロスタムは、口元を皮肉に釣り上げてみせた。

「私は心の狭い男でしてな。死ぬ前に、あなたの父上に借りた恩を返しておかないと、おちおち眠ってもいられないのですよ。ですから、遠慮なく受け取って下され。これも人助けですぞ」

ロスタムは笑いながら言った。

「ありがとうございます」

アリアディエールは、ロスタムに深々と頭を下げた。

「良いのです。戦が終わったならば、いつでも戻って来てくだされ。あなたに任せたい仕事は幾らでもあるのですから」

「ロスタム殿。壮健であって下さい」

馬が全員に行き渡り、鞍の空いた馬には糧食を積み込んだ。

アリアディエールは、アルフォンスから形見の剣を受け取ると、鞘から抜き放ち空へ向かって掲げた。

アルフォンスとリヴェリーも槍と斧を交差させた。

「私はここに誓う。信義の為に、皆と共に戦い、自らの命を使い尽くす事を」

アリアディエールの言葉に再び男達は、歓声で答えた。

総勢三十人の軍隊。

軍勢と呼ぶには、余りにも少ない人数であった。だが、アリアディエールの、信義を賭けた戦いは、ここから始まるのだ。

「では、行くぞ」

アリアディエールの言葉に続いて、アルフォンスが全員に乗馬を命じた。

アリアディエールを先頭に、軍勢が進み始める。

目的地は、王都ヴァンドゥーム。

そこから、義勇兵として、北部州の戦場へと向かう。

アリアディエール達の行く手を阻むかのように、砂塵を含んだ寒風が、吹き抜けていった。だが、誰一人として下を向く者はなかった。

夢、信義。

アリアディエールは、形なき物を求めて向かう旅路の、ごく小さ

な一歩を踏み出した。

第二章 後継者 第一節

執務室の扉が、乾いた音を立てた。

メクセスは豪華な椅子に腰を掛けて、書物に目を落としたまま、訪問者に入室を命じた。

「失礼致します」

姿を現したのは、長身の若者だった。メクセスの下で、秘書官を務める、アスマーンである。鍛え上げられた、細身の剣のような引き締まった体躯と、それに似つかわしくない、柔和な表情が印象的だった。

アスマーンはメクセスに歩み寄ると、直立不動の姿勢で向かい合った。

メクセスは何も言わず、書物の頂をめくった。

「そろそろお時間です」

「今、いい所なのだ。後にしてくれ」

アスマーンは、苦笑しかけた表情を引き締めると、真面目くさって言った。

「式典の主役を遅刻させたとあつては、部下としては立場がありません。お急ぎ下さい」

メクセスは、ため息混じりに書物を閉じて、机の上に投げ出した。

メクセスの蒼色の瞳には、不満がありありと浮かんでいた。

アスマーンの目に、ミステリア建国史という、書物の題名が飛び込んできた。

「建国王ヴィンフリートが、最後の決戦に望む場面であつたのにな」メクセスは、絹の金糸に似た髪を掻き上げて言った。

「またの機会になさいませ」

「伯爵公子という肩書きも、存外面倒なものだな。書を読む暇さえ無いとは」

メクセスは、芝居がかった口調で言った。

「式典が済めば、肩書き自体は短くなります」

「余計に暇はなくなるがな」

メクセスは、口元を釣り上げてみせた。

「仕方ありません。上に立つ者の務めでございますから」

「わかつているさ」

領地経営、領民の守護など、領主の双肩にかかる負担は、決して少なくない。メクセスは、爵位に伴う責任を放棄するつもりはなかったが、つい愚痴が出てしまう。

「形式を整えるというのも、馬鹿馬鹿しいものだ。いつそ止めにしないか、式典など」

冗談とも本気とも取れる、メクセスの口調であった。

「爵位と領地が継承されたことを、皆に知らしめねばなりません」

「若すぎる領主に、皆が不安にならねばよいがな」

他人事のように、メクセスは言った。

この時、メクセスは二十四歳。先代伯爵、メクセスの父親が、病により死去したために、継承の儀が執り行われることになったのだが、継承者の人選に対して、反対意見があったようだ。

だが、先代伯爵の遺言により、メクセスが次の伯爵として選ばれたのである。

メクセスからすれば、自ら爵位を望んだ訳でもないのに、他人にあれこれ言われるのは不本意であった。

メクセスには、腹違いの兄が二人いる。先代伯爵の正妻の息子であり、継承順から言えば、どちらかが家督を継ぐものと、誰もが思っていた。そうであるからこそ、メクセス自身も、成人するとすぐに家を飛び出し、王都ヴァンドームの士官学校に入学したのだ。妾腹の出であることに、メクセスは何の後ろめたさも感じてはいなかった。自分では、どうにもならない事である。

ただ一つ気がかりだったのは、メクセスの父親がどういふつもりで、自分を後継者に選んだのかという事だ。

メクセスの能力を見込んだのか、はたまた、自らの罪滅ぼしか。

父親の死去と共に、メクセスは、永遠に答えを確かめる術を失ってしまった。

「式典での、義母上の顔が見ものではあるか」

メクセスは、偽悪的に言った。

「メクセス様が行動によつて、領主に相応しい事を示されれば、誰も何も言いますまい」

メクセスの抱えている、複雑過ぎる感情を理解していたアスマーンが、殊更に真剣な表情で言った。

一つ年上でしかないアスマーンが、年長者らしく振る舞うのが、メクセスには可笑しかった。

メクセスが笑いをこらえるのを見て、アスマーンは咳払いをした。「お喋りはこの位にしておこうか。これ以上待たせると、後で何を言われるか解らんからな。行くでしょうか、秘書官殿」

ようやく笑いを収めると、メクセスは立ち上がった。

「ええ、領主としての務めに、遅刻というものはありませぬから、伯爵公子殿下」

士官学校時代から、二人の間で何度となく繰り返してきた、皮肉の応酬に苦笑し合うと、式典の行われる謁見室へと向かった。

爵位継承の式典が行われている謁見室には、数多くの人々が、詰め掛けていた。伯爵家に仕える、武官、文官、親戚筋にあたる者が顔を揃え、新たな領主が誕生する場面を見つめていた。

「国王陛下の名において、ここに、トロウス伯の称号を授けるものである」

メクセスは、恭しく片膝をついた姿勢で、典礼官の読み上げる内容を聞いていた。

列席者の視線が、メクセスただ一人に向けられていた。羨望、嫉妬、歓呼、侮蔑。メクセスは、自分に向けられている、正負入り混じった人々の感情を、分析してみたいという心境になった。

典礼官が儀礼用の長剣で、メクセスの両肩に触れた。継承の儀は

それで終了であった。

「メクセス・ドウ・トロウズよ。立ち上がるがよい」

メクセスは命ぜられるまま、優雅に立ち上がると、集まった観衆に向かつて片手を上げた。場内を万雷の拍手が満たしていった。

（……果たして、どれだけの者が本当に喜んでいるのやら）

メクセスは、皮肉な考えにとらわれたが、表情には一切表さなかった。

メクセスは、ふと、自分に向けられている、敵意のこもった冷たい視線に気がついた。予想はついていたが、メクセスは敢えてそちらの方向を見た。

メクセスの義理の母親でもある、イグレーヌ伯爵夫人だった。敵陣に向けて放たれる矢のように、イグレーヌは敵意剥き出しの視線をメクセスに射込んだ。

メクセスは内心、ため息をつきながら、イグレーヌに向かつて微笑んで見せた。

メクセスの行動に気がつく、イグレーヌは顔を赤くしながら、姿を消した。

（こんなことをするから、義母上に嫌われてしまうのだな）

メクセスは苦笑した。もともと、義母との折り合いが悪く、メクセスにも好かれようとする気が全くなかったため、メクセスとイグレーヌの間にある、親子関係は完全に冷え切っていた。

二人が名ばかりの親子というのは、領内では、半ば公然の事実であつたが、メクセスは平然としていた。

すぐに気を取り直すと、メクセスは歓声に応えるために、頭の中から義母の顔を打ち消した。

式典に続いて行われていた酒宴は、豪奢なものだった。

壁際で葡萄酒の杯を片手に、仏頂面で佇んでいる一人の武官に、同僚が声をかけた。

「替えの杯をお持ちしましょうか、ハルバートン殿」

「ジオラルドか」

ハルバートンは、声をかけてきた同年齢の同僚に、不機嫌そうな表情を向けた。実際に、ハルバートンは不機嫌であったが、もともと愛想という言葉が、似つかわしくない表情をしているので、大多数の者には誤解を与えている。その中でも、ジオラルドは、数少ない例外であった。

「お前の考えを当ててみようか」

「やめておけ」

ハルバートンは、目の前の同僚が的確に、自分の考えを見抜いていることが、解っていた。

「あんな若僧に、領主が務まっていたまるか、だろ」

「おい」

ハルバートンは、たしなめてみたが、否定もしなかった。

「凶星だな」

ハルバートンは、黙ったままだった。

ジオラルドは整えられた顎髭を撫でながら、相好を崩した。

「まあ、自分より十年遅く生まれた奴に使われるのは、誇りが許さぬか。それが、妾の子であるなら尚更」

「年齢や生まれの問題ではない。俺が問うているのは能力だ」

「確かにな。だが、俺の見た所、あの金髪の若君は、そう悪くはないかもしれんぞ」

ジオラルドは、新しい主君に向けて杯を上げて見せた。

「士官学校での成績も、なかなかの物だったらしいからな」

「実戦では、どうか解らんだろう」

「それは、二人の兄の方も同じであろう。知識のあるだけましなのではないか」

「随分と肩を持つではないか」

「おかしいか？」

ハルバートンは、ジオラルドの性格を熟知していた。優しげに笑いながら、辛辣な毒を吐ける男である。新たな領主に対する人物評も、

自分と同じであろうと、ハルバートンは思っていたが、どうやら違っていたようだ。

ハルバートンは、不機嫌そうな顔を更に険しく歪めると、黙ってしまった。

ジオラルドは笑いながら言った。

「お前の心配は解る。先代の伯爵閣下と比べて、頼りなく見えるのだろう」

「何かあつてからでは遅いのだ」

「北部が騒がしい件についてか」

青銀の信徒と呼ばれる、宗教団がミステリア北部に於いて、勢力を伸ばしていることは、ミステリア中央部にも知れてきている。北部の歴史的背景を鑑みても、ミステリア北部、ひいては国全体が乱れる火種がくすぶっていることは、疑う余地がなかった。

にもかかわらず、領主が変わり、しかも、ハルバートンの目には、力不足に見える男が、後継者となってしまった。ハルバートンとしては、今後の領主の方針に、疑義を抱かざるを得ないのである。

「まあ、新たな領主のお手並みを拝見してからでも、遅くはあるまいよ。優秀ならば、それでよし。無能ならば、我らも補佐のしがいがあるというものだ」

からからとジオラルドは笑ったものである。

「貴様の樂觀的な考えには感心する」

ハルバートンは、半ば呆れるように言った。

「まあ、有害ならば、排除するしかなくなるがな」

表情を崩してはいたが、ジオラルドの目は笑っていなかった。

ハルバートン、ジオラルドの両者は、共に二十代の頃から、先代伯爵に武官として仕え、トロウズ伯の旗の下に、幾多の武功を立ててきた歴戦の騎士である。積み重ねてきた時間の果てに、軍の中枢に駆け上がってきたのである。それだけに、メクセスに対する評価は厳しかった。

「心配事はそれだけではない」

ハルバートンは話題を変えた。

「伯爵夫人のことか」

「気性の激しい方であるからな。今回の継承の事についても、最後まで反対していた」

「一混乱あるか」

ジオラルドは面白そうに言った。

「それでは、困るのだ」

「表だつては何もあるまいよ。仮にも親子だ。血の繋がりはないがな」

ハルバートンもそう思ったかった。仮にも、武官の長である自分が、そんなことにまで、煩わされるのは余りにも情けない。

ハルバートンの肩に手を置くと、ジオラルドは言った。

「焦る必要はない。何かあれば、我々が何とかする。それだけの事だ」

ジオラルドは、苦労性の同僚に笑ってみせた。

ハルバートンは嘆息しただけで何も言わなかったが、同僚の気遣いに感謝していた。

ハルバートンは、すっかりぬるくなってしまった葡萄酒を一息に煽った。

第二章 後継者 第二節

絹を引き裂く音が、広い部屋の中に響き渡った。何の罪も無い枕が、無残に引き裂かれ、中に詰められていた羽毛が舞い散った。

「ああ、口惜しい。あのような身分卑しき者が家督を継ぐなど、あってはならぬ」

アルフレドは、うんざりした表情で、けたたましく喚き散らす自分の母親の姿を見つめていた。

継承の儀が済んでからの数日間、イグレー又伯爵夫人は、息子の部屋を訪れては、物に当たり散らし、不平不満をぶちまけていた。

かつては、社交界を騒がせた、可憐な一輪の花であったのだが、時の流れが残酷にも、夫人の姿を変貌させてしまった。

イグレー又夫人が、ひとしきり喚き散らし息を切らすと、アルフレドはようやく母親に声をかけた。

「母上、落ち着いて下さりませ」

「これが落ち着いていられますか！」

何度このやり取りを繰り返しただろうか。アルフレドは内心、いい加減にしてくれ、と叫び出したい気持ちであった。そうしなかったのは、生来の気の弱さと、幼い頃から植え付けられてきた、母親に対する恐怖心の為である。

アルフレドは、義理の弟である、メクセスよりも三歳年上であり、母親に対して、本来ならば成熟した大人としての対応をすべきであったが、いつも気性の荒い、母親の剣幕に押し切られてしまうのだった。

「アルフレド。大体、そなたが伯爵位を継ぐべきだったのですよ。悔しさはないのですか、あなたには！」

「……すみませぬ」

自分の反論は、母親の再反論を呼ぶだけであると悟っていた為、アルフレドは恭しく頭を下げた。そうして、母親の起こした、暴風雨

が過ぎるのをひたすら待つ。ここ数日で、アルフレドが身に付けた対処法だった。

いつも通りならば、卑屈に縮まっているアルフレドの姿を見て、イグレーヌ夫人は更になじる言葉を浴びせるのだが、今日に限っては様子が違った。

「でもね、アルフレド。私はお前の為を思つて、あえて厳しいことを言うのですよ。これから、お前の為すべきことは何か解つていきますね？」

イグレーヌ夫人の言葉に驚いたアルフレドは、下げていた頭を慌てて上げた。今まで聞いたことのない、母親の優しい声であった。アルフレドの目に映ったものは、微笑みを浮かべた母親の姿だった。

「あの下賤の者に奪われたものを、必ず取り戻すのです」

イグレーヌ伯爵夫人の、穏やかな声が、アルフレドにはひどく歪んだものに聞こえた。

アルフレドは、母親の凄惨な笑みに背筋が凍りついた。母親は自分の言っていることの意味が、解っているのだろうか。

アルフレドは、それ以上イグレーヌ夫人の顔を直視出来ずに、深く俯いた。

……兄上、お恨み致しますぞ。

本来ならば、自分に代わつて実の兄が爵位を継ぐはずだった。だが、そうはならず、アルフレドの方が、貧乏くじをひかされてしまった。

アルフレドには、兄が自分に責任をなすりつけたようにしか思えなかった。

この場にはいない、兄に向けられたアルフレドの呟きは、あまりにも低く、言つた本人の聴覚以外を刺激することはなかった。

爵位を継承した後、メクセスは精力的に職務に取り組んだ。領内の状態を把握し、何を為すべきなのか判断する。

執務室にしつらえられた、メクセスの机には、報告書や決済を待つ書類が、小高い山脈を形成していた。メクセスは、その一つ一つに、つぶさに目を通していく。特に、青銀の信徒と呼ばれている集団については、詳細な報告を提出するように命令を出していた。

「近々、北部で何か動きがありそうだな」

メクセスは、傍らで書類の整理をしていたアスマーンに言った。

「やはり、そう思われますか」

アスマーンは書類の山から顔を上げるとそう答えた。

歴史的経緯と現在の情勢から考えて見ても、北部州において、何か動きがあると考えるのが自然だった。

滞留している地下水が、地表へ噴き出すように、鬱屈している北部の民の感情が、反乱という形を伴って表れても、何の不思議もない。

「さて、我々はどうするべきかな、秘書官殿」

「まずは、領内の掌握が最優先の課題で、ございましょう」

「確かに」

自嘲混じりの笑みを、メクセスは浮かべた。

新米伯爵としては、領内における自分の影響力を確立することが何よりも必要であった。今のところ、危急の事態が生じたとしても、動きの取りようがない。

正確な情報を仕入れると共に、メクセスは幕僚の人選も並行して進めていた。

領地と爵位を継いだものの、目下の所頼りにできる人材が、アスマーンだけに限られていたからだ。自分とアスマーンの二人で領内の全てを取り仕切るわけにもいかず、早急に陣容を整えなければならなかった。

武官については、人員はある程度揃っていたが、メクセスに対して、隔意を持っているのが明らかであり、文官に至っては、頂点に据えるべき人材がこれといって見当たらなかった。

来たるべき時に備えて、軍の掌握と組織の編成が必要であった。

「約束を果たす時が来たか」

メクセスは呟くと、一人の男の顔を頭に思い描いた。
名をリクセンと言った。

計数に強く、農業の知識も豊かであった為、先代伯爵の下で、政務官を務めていた。

しかし、齒に衣を着せぬ物言いと、気性の激しさのせいで、先代伯爵の不興を被り、地位を追われていた。

その後は、領内の農村に隠棲し、晴耕雨読の生活を送っているという。未だ、四十代だというのに隠居生活を営んでいるという話であった。

今のメクセスにとっては、是が非でも幕僚に招いておきたい人物である。メクセスの知る限り、文官の長として一番ふさわしい人物だった。

「やはり、苦労は他人と分かち合うべきだな」

もつともらしく、メクセスは言ってはみたが、悪意を持って聞いたならば、ただ面倒臭がりなだけに聞こえただろう。

全てを自分一人でやろうとすることの愚を、メクセスは理解していた。

「私は出かけるぞ」

唐突にそれだけ言うと、メクセスは立ち上がった。

「どこに行かれます。予定では調練の視察がありますが」

「すぐに戻る。人を迎えにいくだけだ」

「ですが」

反駁しかけたアスマーンも、静止が無意味であることを理解していた。言い出したら聞くお方ではない。アスマーンは、自分の仕える人物の人となりを思い、ため息を一つついた。

「すぐに支度致します」

メクセスは、アスマーンの返答を予期していたように、にやりと笑ってみせた。

半刻の後、数人の護衛兵とアスマーンだけを伴って、メクセスは小さな農村に着いた。

いかにお忍びとはいえ、伯爵の訪問にしては規模があまりにも小さすぎた。

アスマーンも控えめに苦言を呈したが、何より面倒を嫌うメクセスに却下されてしまった。アスマーンは、やや大袈裟ではあったが、必死に説得を試みてようやく、護衛を数人連れていくことをメクセスに了承させたのである。

メクセスはややうんざりしたように呟いた。

「人に会いに行くだけで、これなものな。爵位を欲しがる奴の気が知れぬ」

無論、メクセスは公人の立場というものを理解していたから、本気で言った訳ではなかった。部下の顔色が変わるのを見て、意地悪く笑っていただけである。

リクセンの住む簡素な家に着くと、部下に訪いを告げさせた。

「賭けてもいいぞ、あいつらでは埒が開かなくなる」

「それがわかつているならば何故命令したのですか」

「せっかくここまで付いてきたのだ。何かさせねば、申し訳ないだろ」

メクセスは含み笑いでそう答えた。

アスマーンは、護衛兵のために、予想が外れるように願った。

「帰って主人に伝えろ。私はこれ以上、宮仕えをするつもりはない」
リクセンは、不機嫌さを隠そうともせず、突然の無礼な訪問者達に告げた。

数人の兵士を前にしてもリクセンに怯む所は全くなかった。

「トロウズ伯からの命令であるぞ」

「それがどうした。一度追い出した者に、今更何の用がある？ 私には用事は無い」

リクセンの迫力に完全に気押されてしまった兵士達は、困った顔を

互に見合わせるだけであった。かつては伯爵家に仕えていた人物に、そうそう手荒な真似をするわけにもいかなかった。

「そう、つれないことを言うな、リクセン」

兵士達の間から、メクセスが、笑いかみ殺しながら、リクセンの前に姿を現した。

「あまり駄々をこねると、強制的に連れていかねばならぬ」
「若様」

リクセンの声は、驚きに震えていた。

メクセスは家の外で待つようと、兵士達を下がらせた。室内はメクセスとアスマーン、リクセンの三人だけになった。

部屋の中には、小さな卓と椅子が置かれていた。かつて、伯爵家に仕えていた者にしては、質素すぎる暮らしぶりだった。

「久しぶりだな。口の悪さは相変わらずだが、壮健で何よりだ」

「若様も立派になりましたな」

「本当にそう思っているのか？」

「ええ、見た目だけならば、立派な伯爵公子であらせられます」

リクセンも、ようやくいつもの調子を取り戻したようだった。相手が誰であろうと、舌鋒の鋭さは変わらないと見えた。

「残念ながら、公子の肩書きは削ることになった。もっとも、私が望んだ訳ではないがな」

リクセンは口髭に覆われた顎に手を当てて考え込むような素振りを見せた。

「若様が爵位を継がれましたか。先代伯爵も、最後には領民のために、良きことをなさったか」

リクセンは、過激なことを平然と言ってみせた。傍らで聞いていたアスマーンの方が心配になったくらいである。

「勝手に継がされる方の身にもなってみろ」

メクセスは、首を振りながら言った。

「爵位と領地が、ふさわしい方の元にやって来ただけのことです」
すました顔でリクセンは言った。

「本当に私が、与えられた地位にふさわしいか、確かめてみる気はないか？」

メクセスは挑発的な口調で言った。

「いえ、私は既に一線を退いた身。お役立てることはないでしょう」
リクセンは固辞したが、メクセスは怯まなかった。

「戻ってこい。お前の力が必要だ」

「ですが」

「今のトロウズ伯では、貫禄がなくていかん。領内での信望が薄くてな、なかなか上手くいかないのだよ」

メクセスの言葉に、アスマーンが思わず、含み笑いをもらした。伯爵本人が言う台詞ではなかった。

「約束しただろう。俺が爵位を継いだ暁には、お前を迎えに行くとその時が来たのだ」

メクセスは表情を引き締めた。

「そんなことも、ありましたかな」

リクセンはやや俯いて言った。

リクセンの脳裏に、まだ幼かったメクセスの言葉が蘇った。

沈黙が部屋の中を満たしていった。

メクセスが真面目な口調で、沈黙を破った。

「三日だけ待つ。その間にお前が来なければ、俺に主としての魅力がないと思い、諦めよう」

リクセンは何も答えなかった。

「その年で隠居するには、まだ早いであろう。まだまだ、お前に樂をさせるつもりはないからな」

笑いながら言うメクセスは、身を翻しリクセンの下を去っていった。

部屋に一人残された、リクセンは椅子に腰を下ろした。

「自分より二十も若い者に、言われる言葉ではないわ」

小さく呟くと、リクセンはしばらくの間、誰もいなくなった戸口を見つめていた。ため息を一つつき、両の手で自分の頬を叩くと、目

を閉じた。

リクセンが目を開いた時には、彼の瞳に決意の光が宿っていた。

第二章 後継者 第三節

小高い丘の上を寒風が吹き抜けていった。

メクセスの眼下では、数百騎の騎兵同士が、赤と青の旗の下に別れ、ぶつかり合いを繰り返していた。互いに陣形を組んで、二度、三度と馳せ違う。

平原を駆ける騎兵の巻き上げる、土埃と馬蹄の響きだけが、辺りを支配していた。

「いかがですか、メクセス様」

馬上から、メクセスと共に調練の様子を見ている、アスマーンが言った。

丘の上には、メクセスとアスマーンの二人だけしかおらず、その時だけは、アスマーンはメクセスに対して、士官学校時代の呼び名で話しかける事ができた。

メクセスは、アスマーンの問いに、何も答えなかった。真剣に調練の様子を見定めているのだ。アスマーンも、それ以上問いを重ねることはしなかった。

メクセスの蒼色の瞳は、騎兵の動きを追っていた。

「赤旗の部隊に、動きの悪い兵がいるな」

メクセスはそう呟いた。

メクセスの視線を追うように、アスマーンも騎兵の動きを見つめる。確かに陣形が、徐々にではあるが間延びし始めている。

「あそこから崩れるぞ」

メクセスが指摘した部分に、急激に方向を変えた青旗の騎兵がぶつかった。錐をもみ込むように陣形を割りながら、突き抜けていった。

「終わりですね」

「ああなってしまったら、どうにもならん」

メクセスは頭を振った。

「なかなか、一系乱れぬという訳にはいきませんね」

「ここしばらくの間、実戦からは遠ざかっているからな。練度が落ちるのも無理はないが……」

メクセスは、やや不満そうに言った。

トロウズ伯領内では、ここ数年、戦らしい戦を経験してこなかった。先代伯爵の、尽力の賜物ではあったのだが、軍にとってみれば、その影響が悪い方に出てきていた。

メクセスも、ミスティア北部の情勢が緊迫したものになっていることは理解していたし、軍の上層部である、ハルバートン、ジオラルドも理解しているはずだった。

しかし、なかなか末端の兵士達までは、実戦さながらという、緊張感が浸透してはいなかった。

無論メクセスも、ハルバートンに対して指示は出していたのだが、ハルバートンの側に、隔意があるのは明らかで、自分のやり方を変えようとはしなかった。

そのため、今回の調練の視察は抜き打ちで行うことにし、その事も、アスマーンと極少数の文官以外には、誰にも明かしてはいなかった。

「もう少し近くで見てみるか」

メクセスは、馬腹を軽く蹴ると、丘を駆け下りていった。アスマーンも黙ってメクセスに続いた。

ハルバートンは、調練の為に造られた仮の陣幕から、調練を指揮していた。

しばらくの間、陣形が脆くも崩れ去る様を首を振りながら見つめていたが、部下に旗を振らせると、陣形を再度整えさせた。

ハルバートンは、一旦調練を中断させ、兵士達を待機させると、動きの悪かった部隊の隊長を陣幕に呼びつけた。

ハルバートンは、不機嫌そうな表情を隠そうともせず、部隊長に叱責を加えていた。

「お取り込み中の所悪いんだが」

飄々と陣幕の中に入ってきたのは、ジオラルドだった。

「なんだ」

「お客様だ」

「何、誰だ」

「我らが主、伯爵様だよ」

ハルバートンは、派手に舌打ちをすると、陣幕の外に出た。

ジオラルドの言う通り、二騎の騎影が、陣幕に向かって駆けてくるのが見えた。

「どういつつもりだ、俺は何も聞いてないぞ」

「さあな。ただの気まぐれか、あるいは……」

ジオラルドは敢えて言葉を続けなかった。

「で、どうするのだ」

困惑する、ハルバートンの顔色を楽しむようにジオラルドは言った。

「迎えぬ訳にはいかんだろう」

ハルバートンは吐き捨てるように言った。

「ま、そうだろうな」

ハルバートンとジオラルドは、二手に分かれて、兵士達を整列させた。

ハルバートンは、兵士達には馬から下りるように命じ、片膝をつかせて、陣幕の前で待機させると、メクセスの到着を待った。

「調練の邪魔をしてすまないな、ハルバートン」

メクセスは到着するなり、馬上で右手を軽く上げ、全員を起立させた。

立ち上がったハルバートンは、険しい表情のまま、メクセスを見据えた。

分かっているならば言うな、とでも言いたげである。

だが、口に出したのは、別の言葉であった。

「視察をなさるとは、聞いておりませぬが」

「なあに、私も言った覚えは無いからな、気にするな」

メクセスはすました顔で言った。

人を食ったようなメクセスの言葉に、絶句するハルバートンの隣で、ジオラルドは、笑いをこらえるのに必死だった。

「それとも、見られてまずい事でもあるのか」

メクセスは、口元に微かに笑みを浮かべた。

それも、分類するならば、意地の悪い笑い方であった。

恐らくは、先ほどの模擬戦の様子も見ているのだろう。メクセスの様子からそれは見て取れた。ハルバートンは、腹を括った。

「閣下。言いたいことがあるならば、はっきり言って頂きたい」

「どういう意味だ？」

「閣下は我々のやり方を、信用していないのでは」

率直過ぎる物言い、ハルバートンは言った。

「それはお互い様ではないか」

メクセスは、敢えて挑発的に言った。

「卿も、領主として私の手腕に疑問があるのである、違うか？」

メクセスとハルバートン、二人の間の空気が、急速に凍りついた。

「我々は、我々のやり方で、領内の安寧に務めて参りました」

「新参者に、あれこれ言われたくない、そういうことだな」

メクセスは、自嘲気味に言った。

ハルバートンは、何も言わなかったが、肯定を意味するように見て取れた。

ハルバートン達にも、武官としての、今まで積み重ねてきた、誇りがあった。

「ならば、確かめてみるか」

「というと？」

今度は、ハルバートンの隣にいた、ジオラルドが受けた。

「単純な話だ。卿らは、私の能力に疑いがあるのだらう。私と、卿らで模擬戦を行うのだ」

「なるほど、閣下ご自身で指揮を執られるのですな」

ジオラルドは興味深そうに言った。

「閣下」

アスマーンは控えめに制止したが、メクセスは無言で手を上げ、アスマーンの言葉を封じた。

「閣下が、そうおっしゃるのなら、我らに断る理由はありません」
ハルバートンは完全にその気になっていた。

「決まりだな。私は赤旗の部隊を指揮するとして。異存はないか？」

「構いませぬ」

「では、準備するのでしょうか」

メクセスは身を翻すと、赤旗の部隊を率いて、陣幕から立ち去った。
アスマーンが慌てて、その後を追った。

陣幕の前に残ったハルバートンは、
深く溜め息をついた。

「少し大人気なかったのではないかな、ハルバートン殿」

ジオラルドは揶揄するように言った。

「貴様も止めなかったではないか」

「無論だ、間違ったことはどちらも言っていないからな。それとも後悔しているのか」

「そうではないが……」

「いずれにしても、ぶつかり合うならば早い方が良い。この先、そんな暇が無くなるかもしれぬ」

「もっともらしい言い方をしているが、単に面白がっているだけではないのか」

「どうせなら何事も楽しむのが信条であるのだよ、俺は」

ジオラルドは、口元だけで笑って見せた。

「貴様が少し羨ましいよ」

ハルバートンは、改めてジオラルドの人となりを考えさせられた。

「メクセス様、何故あのようなことを」

メクセスに追いついたアスマーンは、開口一番に苦言を呈した。

「仕方ないだろう。向こうが売ってきた喧嘩だ」

「わざわざ、相手の言い値で買うこともありますまい」

「必要なことなのだ。お前も解るだろう。軍人がどういう生き物なのかを」

アスマーンも、士官学校の出身であつたから、メクセスの言わんとするところは理解出来た。

単純ではあるが、力のあるものが上に立つ。相手に自分の存在を認めさせたいのならば、能力において、相手を上回ることを見せなければ良い。

解つてはいるが、他にやり方は無いのかとも、アスマーンは思う。「そもそも、勝算はあるのですか。相手の指揮官は百戦錬磨の騎士ですよ」

「忘れたのか、士官学校時代、俺とお前が組んだ模擬戦は、全戦全胜だぞ」

メクセスは、笑いながら言った。

「作戦は立っているんだろう、秘書官殿」

「人任せで、喧嘩をするつもりだったのですか」

「いいや、お前も私も、多分同じ事を考えていると思つてな」

先程の調練を見ていて、アスマーンは作戦案を思いついていた。だが仮に、作戦を正確に実行出来たとしても、勝算は五分と五分。

アスマーンは、ためらいがちに、自分の考えていた作戦をメクセスに話した。

「まあ、それしかないだろうな」

メクセスも同じ事を考えていた。

「危険が大き過ぎる気はしますが……」

「仕方あるまい。領主として、乗り越えなきやいけない壁というやつさ。出来たら避けて通りたいが」

メクセスは、作戦を了承すると、各部隊長を集めて、作戦内容を指示した。

作戦内容を聞いて驚く部隊長達を前に、メクセスは言った。

「なあと、負けた所で恥を搔くのは私だ、お前達ではない。私の指

示に従えば、間違いなく勝てる。気楽にやればいい」

平原の中央で、旗が大きく振られた。

向かい合う、五百騎と五百騎の騎兵が動き始めた。

青旗の騎兵の先頭に立つのはハルバートン、殿にはジオラルドが立っていた。

行きがかり上、こうなってしまったが、やるからには勝つ。今まで積み上げてきた、騎士としての誇りと、軍人としての救いがたい性である。

赤旗の騎兵隊が近づいてきた。

勢い良く駆けてくる、人馬の群れ。

ハルバートンは、様子を窺うように軽くぶつかり、そのまま駆け抜けた。

部隊の方向を変えて、再度馳せ違う。

赤旗の先頭にはアスマーンが立っていた。メクセスの姿はどこにも見えない。

なかなかやるではないか。

ハルバートンは内心、舌を巻いていた。実戦経験のない騎士にしては、なかなかの指揮を見せていた。

だが、負ける気はしなかった。

三度目の交錯で、赤旗の部隊が、揺らぎ始めた。

陣形が間延びし、中央部に隙間が出来始めていた。

次で決める。

ハルバートンは、先頭の部隊とぶつかり合う事は避け、相手の左翼から、中央部を割りにかかった。

赤旗の部隊が、急角度に左翼に切り込まれ、そのまま陣形が崩れていくかに見えた。

ハルバートンの目の前には、道が開けていた。

その刹那、ハルバートンの背筋に、嫌な感覚が走った。何かおかしい。

戦場に立つものならば、誰もがかなり小なり持っている、危険予知の感覚だった。

次の瞬間、強烈な斬撃がハルバートンを襲った。

ハルバートンは、反射的に調練用の槍ではね返した。

誰あるう、メクセスの放った一撃であった。

メクセスはそのまま、右、左と、調練用の木剣で斬撃を繰り返す。ハルバートンは、受けに回らざるを得ず、足止めを食わされてしまった。

後方から来る部隊も、次々に足が止まってしまふ。

メクセスは、右翼中央部に待機し、突入して来た部隊を、自らが率いる一部隊で足止めすることで、陣形の分断を防いだ。

その為、ハルバートンの部隊は、陣形の真っ只中で、動きを止められ、ともに挟撃を受ける形になった。

メクセス達は、敢えて陣形を間延びさせて、中央部にハルバートンを誘い込んだ。

メクセスの部隊がハルバートンを足止めして、アスマーンの部隊で挟撃する作戦だった。

中央部に突入する瞬間さえ分かれば、後は、アスマーンの率いる前方の部隊が戻って来るまで、突っ込んできた部隊を、メクセスの率いる後方の部隊が留めておけば良かった。そして、先程の調練を見ていたお陰で、その瞬間は把握していたのだ。

とは言え、ハルバートンの陣頭指揮による、突撃である。メクセスでも、完全に足止め出来るかは賭けだった。

だが、メクセスは、始めから負けぬことに徹し、何とか、陣形が瓦解するのを防いだのである。

メクセスは、勝利の女神を、自分の方へ振り向かせることに成功した。

最早、ハルバートンとジオラルドの指揮する部隊は、半包囲の態勢にあり、次々と兵士達が馬上から、突き落とされていった。

「やられたな」

ジオラルドは、瓦解した騎兵を再編成すると、ハルバートンの所へ馬を寄せた。

「ああ」

ハルバートンの返答は短いものだったが、悔しさが滲んでいた。

「新しき主も、なかなかどうして、やるではないか」

ジオラルドは、嬉しそうな顔で言った。

ハルバートンは黙って頷いた。

ハルバートンとジオラルドは、メクセスの作戦指揮を認め、素直に兜を脱ぐことにした。

兵士達を待機させ、陣幕の中に入った、ハルバートンとジオラルドを、メクセスが出迎えた。

「これで少しは、解ってもらえたかな」

メクセスは、蒼色の瞳をきらめかせて言った。

ハルバートンとジオラルドは、メクセスの前に恭しく片膝をついて頭を垂れた。

メクセスは、二人を立たせて言った。

「とは言っても、正直、成算は五割であつた。卿らのような、勇敢な部下が居てくれるお陰で、私も樂が出来るといふものだ」

「今までのご無礼、重ねてお詫び申し上げます」

ハルバートンは恐縮して言った。

メクセスは被りを振った。

「構わぬ。今後、卿らには苦勞をかけるかもしれぬしな」

メクセスは、言外に、出兵が近いことを匂わせて言った。ハルバートンとジオラルドも、それを理解していた。

陣幕が、柔らかな空氣に包まれかけた時、一人の兵士が、血相を変えて飛び込んできた。

「申し上げます。王都からの急使によれば、ミステイア北部のアルデンヌ伯領内にて、叛乱が起こった模様」

四人は、真剣な表情で、顔を見合わせた。

周囲の空気が、瞬時に張り詰めていった。

「わかった」

メクセスは短くそう答え、腕を組んだまま、しばらく沈黙した。

「ハルバートン、ジオラルド、兵士達をまとめよ。館へ戻り次第、緊急の会議を開く」

「かしこまりました」

ハルバートンとジオラルドは素早く身を翻すと、陣幕から立ち去った。

「メクセス様」

「思っていたよりも、早かったな」

アスマーンは、黙って頷いた。

来るべき時が来たようだった。

領主として、打つべき次の一手に、メクセスの手腕が試されることになる。

このまま戦火が拡大すれば、領民の生活と生命が失われてしまう。それだけは絶対に避けなければならない。

メクセスは、伯爵としての、初めての大きな岐路に差し掛かっていた。

第三章 アルデンヌの動乱 第一節

蒼空に向かい、そびえ立つ四本の尖塔。

その姿は、吟遊詩人によって、世界を作り出した、神々に向けて突き出された長槍にも、例えられている。

大陸の中央部に位置する、巨大な城塞都市、ミステリア王国の王都ヴァンドゥーム。

二百年前、初代国王ヴィンフリートがこの地に、ミステリアの王国旗を立ててから、只の一度も、城塞の偉容が揺らぐことはなかった。

だが、建国二百年を迎えたこの年、季節外れの、強烈な寒風と共に、王都ヴァンドゥームにもたらされたその報せは、その場にいた人間達を、冷たく凍り付かせたのである。

アルデンヌ伯領にて叛乱。軍勢の数、およそ十万。至急、援軍を乞う。

アルデンヌ伯領から、早馬で駆けに駆けた伝令兵は、城門の守備兵に援軍を求める親書を手渡すと、その場で絶命した。

報せを聞いた、現ミステリア国王、オーギュスト三世は、幕僚を召集し、緊急の会議を開いた。

「国王の御成りである」

典礼官の声と共に、会議場の巨大な扉が開かれた。

会議場にしつらえられた円卓には、既に幕僚達が、顔を揃えていた。扉が開くと同時に、全員が立ち上がり、左胸に拳を当てる、ミステリア式の敬礼を施す。

オーギュスト三世は、王妃メアリアに手を引かれながら、のろのろと円卓の上座にある、自分の席に腰を下ろすと、右手を軽く上げて、幕僚を着座させた。

「では、これより緊急の会議を行う。まずは先ほどの報せを」
宰相のフォーモルが、手元にある親書の内容を読み上げた。

出席した一同に緊張が走った。

「この緊急の事態に対して、皆の意見を聞きたいと思う」

「至急、援軍を送るべきだ」

先陣を切って、強い口調で言ったのは、ゼライル將軍だった。

ゼライルの、右の頬に残る傷跡が、いかにも猛将という印象を周囲に与えていた。

「王国軍の総力を上げて、これを鎮圧しなければ、国の威信に関わる。そうでしょう、大將軍」

「うむ、しかしだな」

水を向けられた、カシームが、顎をさすりながら、曖昧に答えた。

カシームはミステリア軍の頂点に立ち、將軍達を束ねる地位にあったが、信望と能力が伴っているとは言い難かった。

もともとは、下級貴族に過ぎなかったカシームが、大將軍という立場についたのも、王妃メアリアの兄だからである。

妹の七光り、という陰口が誰ともなく、囁かれるようになっていた。

「まあ、いきり立つな、ゼライル將軍。援軍を出すにしても、規模と補給の問題がある」

重厚な声で、ゼライルの隣席に座る、ロレンツォ將軍が言った。

ミステリア国軍総勢三十万、と呼号してはいるものの、短期間にそれだけの兵力を動員するのは、事実上不可能であった。

去年の秋の不作で、小麦の収穫が少なく、三十万もの兵力を支える糧食の備蓄が無い。また近隣の街や村から徴発するにしても、国庫の負担は莫大なものになる。

更に、それだけの兵力を、編成するための時間が、圧倒的に足りなかった。

「今までの、北部に置ける農民の叛乱とは訳が違う。軽々しく動くのは避けるべきだ」

ロレンツォ將軍が重々しく言った。

他の者が同じ事を言えば、怯懦と取られかねないが、宿将たる口

レンツォの言葉は重みが違っていた。

不満ではあったが、流石に、年長者の前では、ゼライルも黙らざるを得なかった。「して、叛乱の首謀者は判明しているのですか？」列席者の中で、最年少の將軍、メディアスが言った。

「賊徒共は、青銀の信徒と名乗っておるらしい」

フォーモルは、皮肉に口元を歪めて、苦々しく言った。

「こちらの出せる兵力は？」

メディアスの質問に、フォーモルは直接答えずに、文官の並ぶ席に視線を向けた。

政務官のギルーが、代表して答えた。

「小麦の昨年の収穫高で計算するに、出せる兵力は五万が限界でしょうな。それも、三ヶ月という条件つきであります」

ギルーの返答は、予想通りであったが、改めて聞くとすると、一同はため息をつかざるを得なかった。

座を沈黙が支配した。

重い沈黙を破ったのは、意外な人物だった。

「兵が足りないのであれば、国内の諸侯、領主達に檄を発してはいかがか」

王妃メアリアが甲高い声で言った。

「ですが、それだけで兵力が足りるすかな」

予想外の発言に、驚きながら、ロレンツォが言った。

「それでも足りねば、民より義勇兵を、募れば宜しいではありませんかぬか」

「なれど」

確かに数は揃うかもしれないが、義勇兵などとは、未だかつて例が無い。

数だけ揃えば、戦に勝てるのであれば、これほど楽なことはないが、実際はそうではない。

だが、それ以上の代案も見つからなかった。

「陛下」

フォーモルが、国王に、最終判断を仰いだ。

「まあ、そんな所であるうな。子細は、將軍達に任せる。その方が何かとやりやすかるう」

良きに計らえ。良く言えばそうとも取れたが、一国の王としては、あまりにも無責任な言葉にも聞こえた。

オーギュストは、そう言うとき軽く咳き込んだ。

メアリアが、オーギュストの背をさすった。

「陛下は、お休みになる。フォーモル、カシームよ。後は任せてよいな」

「御意」

カシームとフォーモルは、共に座礼で答えたが、その表情は対照的だった。

メアリアは、オーギュストの手を引くと、共に会議場を後にした。

幕僚の全員が、起立して敬礼を施した。

「陛下の御加減は、大丈夫なのでしょうか」

メディアスが、不安そうな表情で呟いた。

近頃、オーギュスト三世は、しばしば病臥し、公務の場に姿を見せぬこともあった。

想像するのも、不敬であつたが、幕僚達にとっては、今後、最悪の事態が起きることも考えねばならなかった。

「何にしても、各地の諸侯に伝令を出さねば。併せて、義勇兵の募集も行ふ。実務的なことは、將軍達に任せる。よろしいな？」

フォーモルの口調は、どこことなく挑戦的であつたが、カシームは短く答えただけである。

「承知した」

カシームとフォーモルの視線の間で、一瞬、無音の剣戟が交えられた。

各地の諸侯、領主に向けて、国王の勅状が送られ、村や街には義勇兵を求める、高札が出された。

その間にも、王都ヴァンドゥームには、二度目の報せが届いた。今度の送り主は、青銀の信徒と名乗る者達であった。

送られてきたものは、蜜蠟に漬けられた、人の首であった。アルデン又伯爵を含め、その家族や臣下、五十もの人間の頭が届けられた。

添えられていた書状には、過去の北部に対する圧政への批判と、政策の転換の要求が記されていた。そして、要求が受け入れられなかった時には、更なる裁きが下される、と締めくくられていた。

賊徒の蛮行に、王都は更に危機感を募らせた。

「賊徒共は、アルデン又城を根拠地とし、街道を南下する模様」
將軍達による、軍議の中で、ロレンツォは言った。

兵法の常道からいえば、アルデン又伯領から街道沿いに南下する、賊徒の補給線が伸びきった所を叩くのが最良であると思われた。

出来る事ならば、可能な限り、敵の軍勢を引きつけたいところだったが、街道沿いの、街や村を見捨てる訳にもいかなかった。

「引きつけられる限界点は、アキテー又丘陵か」

ロレンツォ將軍は、円卓に広げられた、ミステリア国内の地図の一点を、指差した。

諸將は協議の末、アルデン又城と、ヴァンドゥームの丁度中間地点に広がる、なだらかな丘陵地帯を戦場を選んだ。

「この地で何とか、奴らを止めねばならぬ」

カシームは重々しく言った。

アキテー又丘陵までは、昼夜兼行で進軍したとしても、十日はかかる。早急に事を進める必要があった。

それから、三日後。騎兵、歩兵合わせて、五万の軍勢が王都ヴァンドゥームを出発していった。

総大将に、カシーム。ゼライル、メディアスの二將は、騎兵を率いて、それぞれ右翼左翼を固めた。主力となる、中央の歩兵の指揮は、ロレンツォが執ることになった。

昼夜兼行の強行軍で、アキテー又丘陵に辿り着くと、その地に本

陣を築き、兵士達に休息を与えた。

併せて、斥候部隊を派遣し、敵の搜索を行った。

街道沿いに向かわせた、部隊から報告がもたらされた。

「敵の規模はおよそ二万、先見隊だと思われます。付近の村を焼き払いながら南下中とのこと」

カシームは、本陣に集まった諸将に言った

「さて、どうしたものか」

「大將軍、出陣の許可を願います。私めにお任せあれば、一戦にて蹴散らして参ります」

ゼライルが、傲然と胸を反らして言った。

「しかしだな、將軍。各地からの援軍も集結中だ。それを待つてからでも……」

ゼライルは、カシームの慎重論に、あからさまに不満そうな表情を見せた。

カシームとしては、なるべくならば、中央軍の兵力を使いたくはなかった。

各地から集まる、援軍を盾に、あわよくば自らが戦功を上げる。

口にこそ出さなかったが、カシームの内にはそのような絵図面が描かれていた。

カシームは、貴重な兵力を割いてまで、危ない橋を渡るつもりは、毛頭なかった。

ゼライルが、重ねて出陣を願う言葉を言いかけた時、突然、本陣の幕が開いた。

「失礼致します」

將軍達の前に、片膝をついて、敬礼を施したのは、一人の青年だった。

「ブランネー伯クリストフ、騎兵二千と共に、推参仕りました」

「おお、ブランネー伯ではないか、よくぞ参った」

カシームの目が輝いた。

ブランネー伯爵家は、ミスティア西部の地域の内、二州を領有し、

一族から宰相、大將軍などを輩出した、名門である。

二年前、先代伯爵が、病を理由に隠居すると、当時、二十五才であつたクリストフが、家督を継ぐことになった。

均整の取れた体躯と、端正な顔立ち。更には、士官学校時代には、優秀な成績を修めていた。

若き伯爵についた異名は、黄金の鷹。ブランネー伯爵家の軍旗の意匠であつた。

クリストフ本人も、自分に向けられる、羨望と期待に応えるように、常に振る舞っていた。

「騎兵二千でござるか？」

ゼライルの目には、嘲弄の色が微かに浮かんでいた。

ゼライルからすれば、伯爵とはいえ、十年も遅く生まれた若者が、絶賛されるのは、面白いものではなかつた。

クリストフは、敏感にそれを感じ取つたが、にこやかに答えた。

「王国の危機なればこそ、騎兵二千のみで先行したのでございます。すぐに、後詰め歩兵八千が部下と共に参ります」

クリストフは、口元を吊り上げて言った。ゼライルは、舌打ち寸前の表情で、横を向いてしまった。

二人の間にカシームが割つて入つた。

「ブランネー伯、卿が一番乗りのようだな、大儀であるぞ」

カシームは、クリストフを立ち上がらせて言った。

「ブランネー伯、卿は参謀として、本陣に就くが良い」

「かしこまりました、有り難き幸せに存じます、大將軍」

クリストフは、再び敬礼を施すと、言った。

「では、兵士達を待たせておりますので、一度席を外させて頂きます」

「ああ、わかつた」

カシームは、笑みを浮かべたま言つた。

諸將に黙礼すると、クリストフは陣幕を後にした。

（中央の將軍とはいえ、存外、器の小さい者もいるものだ……）

クリストフは内心で、ゼライルの先程の発言をこき下ろした。

だが、そうであるからこそ、自分が羽を大きく広げる事が出来る
というものか。

クリストフにも、野心はあった。名門の誉高い家柄ではあるが、
ただか地方の一領主で人生を終えるつもりは無かった。

この戦で、俺の名を国中に轟かせてみせる。

クリストフはそう思い直すと、不敵な笑みを浮かべた。

第三章 アルデンヌの動乱 第二節

叛乱計画は、驚く程順調に進行していった。

叛乱の嚆矢は、アルデンヌ城に向けて放たれた。

青銀の信徒を率いる、教祖ルタレクは、十万の信徒達で、アルデンヌ城を攻囲した。

戦に慣れぬ民を指揮している為、攻城戦は手間取るかに思われたが、三日間で、呆気なく城は落ちた。

奇襲が成功したのもあるが、守る側に油断があったのだ。でなければ、あまりにも手応えが無さ過ぎる。

失った信徒達の数は極僅かだった。

ルタレクは、民に救いをもたらすという、教義の下に、困窮する北部の民を集め、叛乱勢力を組織する。彼らに武器と食物を与え、兵士とした。

根拠地となる城も手に入れた。

城内に蓄えられていた、武器や糧食を手に入れ、長期戦にも耐えられる態勢を整えた。

領主を含め、主だった者の首を跳ねて、王都に届けさせた。国王に対する挑発と、自分達の覚悟を知らしめる為だ。

このまま街道を南下し、王都ヴァンドウムへ進軍すれば、恐らく、正規軍とぶつかることになるだろう。

正念場であった。

次の一戦で、勝てなければ、今まで積み上げてきた成功が、砂上の楼閣のように瓦解するに違いなかった。

ルタレクは、薄暗い部屋の中で、地図に見入っていた。ぶつかるのはここか。

ルタレクの視線は、地図上の街道をたどり、アキテーヌ丘陵の地点で止まった。

気付くとルタレクは、親指の爪を噛んでいた。

部屋の中の空気が、ひどく冷えたものに感じられた。

事ここに及んで初めて、ルタレクは、叛乱の汚名を被った重圧に、身を震わせていた。

今まで、ミステイア北部地方に住む民は、中央政府の政策に締め付けられていた。

痩せた大地と、苛烈な租税の取り立てが、民を苦しめていた。

これは、叛乱などではない。

自分に、ずっと言い聞かせていた。

ルタレクにとっては、奪われた物を取り戻す為の戦いだった。

ジェレミ、デュガリー、二人の弟達と共に、ミステイア北部州、各地の農村を回り、教えを説いていった。

いつしか、人が人を呼び、信徒の数は、今では十万人を数えていた。

ここまで来るのに、十五年もかかってしまった。気付けば、四十の半ばを過ぎても、妻帯することなく、年を重ねていた。

中央の正規軍を相手に、劇的な勝利を得ることが出来れば、中央政府の連中は、講和を求めて来るに違いなかった。その際、アルデン又伯領の割譲を、条件として突きつける。

信徒を中心とした、新たな国を作る。

苛烈な搾取の無い、平等な国。

長年追い求めていた夢だった。

ルタレクの立てた戦略は、ここまでは予定通りであった。

だが、本当にそうなのか。

どこかで、大きな考え違いをしていないだろうか。

巨大な陥穽が、自分達を飲み込もうとしているのではないか。

ルタレクが、一人にいる時、言い知れぬ不安の波が襲ってきた。

ルタレクは目を閉じて、ともすれば恐怖に押し流されそうになるのを、必死でこらえていた。

不意に、部屋の扉が、乾いた音を立てた。

「入れ」

ルタレクは、頭をひとつ振ると、重々しい口調で言った。

「兄者」

入室して来たのは、一番下の弟のデュガリーだった。

「何の用だ」

ルタレクは、自分の抱えている感情を気取られぬよう、殊更に突き放して言った。

デュガリーは、頭を掻きながら言った。

「兄者、次の戦の事なんだが」

デュガリーは、ジェレミと共に、戦場で信徒達を率いていた。信徒達には、自分達のことを、將軍と呼ばせているようだった。

「信者はどの位連れて行けばいい？」

ルタレクは、腕を組んで、ため息を一つついた。

ジェレミ、デュガリーの二人は、戦の指揮にはそこそこ力を発揮したが、それ以外の事は全て、ルタレクが取り仕切っていた。

二人の弟も、ルタレクの指示通りに動く事に、何の疑問も持っていなかった。

自分の思い通りにはなるが、どう動くべきなのかを相談することもできなかった。戦略の全てが、ルタレクの双肩にかかっているのだ。

ルタレクは、結論を出すのをためらった。

全軍を連れていかせるべきか、或いは。「二万を先見隊として、連れて行け。後詰めに三万を出す」

ルタレクは、体の中から絞り出すように言った。

半数の信者達は、アルデンヌ城の防備に残しておく。それが正しいように、ルタレクには思われた。

「わかった」

デュガリーは、短く言っただけだった。

これまでもそうだった。自分の意見は差し挟まず、ルタレクの言葉に忠実に従う。

些か自分勝手ではあるが、ルタレクにはその態度が、物足りなく

もあり、腹立たしかった。

「それだけか？」

「ああ」

「ならば、行け」

デュガリーは、黙ったまま振り向くと、扉に手をかけた。

「待て、デュガリー」

「何だい、兄者？」

全軍を連れて行け。

ルタレクの喉元まで、言葉が出なかった。

乾坤一擲の勝負に出るのは、今この時ではないのか。ルタレクの、内なる声が囁いた。

「……酒を持ってこい」

ルタレクは、思っていたことと、別の言葉を口にした。

「わかった、今日は冷えるからな」

デュガリーは、満面の笑みで答えると、部屋を出て行った。

これで良いのだ。

自分に強く言い聞かせたが、再び、震えが足下から、這い上って来た。

何故言えなかったのだろう。ルタレクは、自分の選択に対する自信が揺らいでいるのを感じた。

ルタレクは、一人になった部屋で、苛立ちを押さえるように、再び爪を噛んだ。

大陸を南北に貫く街道を、固い蹄の音を響かせながら、北に向かう一団の姿があった。

総勢、三十人の小さな軍勢であったが、アルフォンス、リヴェリーの率いる十騎ずつの騎兵隊が、中央を走るアリアディエールの両翼を固めていた。

アリアディエール達は、王都ヴァンドウムへの行軍中に二度、賊の襲撃を受けたが、誰一人欠けることなく、これを撃退した。

戦と呼べる程、大したものにはならなかった。アルフォンス、リヴェリーの率いる騎馬隊が駆け抜けただけで、賊は蜘蛛の子を散らすように、退散してしまったのだ。

「調練にもなりやしないぜ」

リヴェリーが、退屈そうに言い捨てた。

賊の残していった武具を回収し、少しは騎馬隊らしい装備が整った。

アリアディエール達の評判が、賊達の下へ届いたのか、三度目の襲撃は無かった。

日が落ちると、街道沿いの平地に、簡素な陣幕を立てて野営をした。

野営のやり方は、アルフォンスが詳しかった。

「放浪生活なぞしていると、自然に身につくものでござる」

感心したアリアディエールに、アルフォンスは笑いながら言った。

夕食を済ませた後、リヴェリーが、村からついて来た若者達に、武器の扱いなどを教えていた。

教え方は厳しいものであったが、戦場で無駄に命を散らす事のないようにとの、リヴェリーなりの配慮であった。

アリアディエール達は、村を出発してから十日後、王都ヴァンドウームの城門をくぐった。

アリアディエールは、アルフォンスに宿の手配を任せると、リヴェリーと二人で、役所へと向かった。

ヴァンドウームの中央にある、王宮の周囲には物々しい雰囲気が漂っていた。

ミステイア全土から、義勇兵の募集に応じた者達が集まっていた。「随分、集まっているみたいですね」

「大方、報奨目当ての連中じゃねえかな」

リヴェリーは、自分達は違うと言いたげであった。

「何にせよ、これで乱を鎮められるのであればいいのですが」

王宮内に設けられた役所の前には、長蛇の列が出来ていた。

アリアディエールとリヴェリーは、半刻（約一時間）程待たされて、ようやく自分達の順番を迎えた。

「次！」

役所に詰めていた兵士に呼ばれて、アリアディエールとリヴェリーは、窓口に向かった。

「ここに記名せよ」

無造作に突き出された書類に、アリアディエールは黙って名を書いた。

「本陣で次の指示を仰げ」

隣にいた兵士が、放り投げるように、鑑札をアリアディエールに渡した。

「何だ、あの態度は」

役所を出るなりリヴェリーは、口元を歪めて言った。

散々待たされた挙げ句、ぞんざいな扱いを受けたのだから、リヴェリーが怒るのも無理は無かった。

「仕方ないでしょう。義勇兵に対する扱いなどあんなですよ」

アリアディエールは、淡々としていた。

「大体、中央の軍隊がだらしないから、俺達が来てやってるんじゃないかねえか」

「まあまあ、鬱憤は戦場で晴らせば良いでしょう」

アリアディエールにたしなめられ、リヴェリーは頭を掻いた。

役所の外では、小さな人ばかりが出来てていた。

宿へ戻ろうとしたアリアディエールとリヴェリーは、足を止めた。

人だかりの中心では、王宮の兵士と、義勇兵と思しき者が睨み合いを続けていた。

「何だ、ありや、女じゃねえか」

リヴェリーは半ば呆れたように言った。

小柄な少年めいた風貌の者は、簡素な鎧を身に纏い、腰に二本の短剣を下げていたが、紛れもなく女性であった。

「行ってみましょう」

アリアディエールとリヴェリーは、人混みを掻き分けていった。

「もう一度言ってみる」

頭一つ身長の違い、王宮の兵士を向こうに回しても、女に怯む様子は無かった。

「ああ、何度でも言ってみよう。許可はやれん、大人しく帰るんだ」

「何故だ、私が女だからか？」

女の白絹のような肌が上気していた。

「……」

兵士は、当たり前だと言わんばかりに、無言で応えた。

「私の意志で、戦に出るのだ。許可だけで構わない、命の保証をしろと言っているのではない」

「女が戦に出て、何が出来る」

やれやれと言わんばかりに、兵士は嘲弄混じりに、口元を歪めた。

「何だと！」

女の言葉の調子が、急角度に跳ね上がった。

女の手が、腰から下げた短剣の柄にかかる。

空気が急速に張り詰めていく。取り囲んだ群衆の輪が中心から離れた。

「何なら貴様を相手に、戦で何が出来るかを試しても良いのだぞ」

女の藍色の瞳が、危険な輝きを放った。

女が短剣を鞘走らせようとした瞬間だった。

「ああ、やっと思つた」

場違いなのんびりとした調子で、アリアディエールは、兵士と女の間に割って入った。

「探しましたよ。手続きは済みましたから行きましょう」

予想外の闖入者に、女と兵士達は啞然として、すっかり毒気を抜かれてしまった。

「あれほど揉め事は止めて下さいと言ったのに」

「貴様……」

突然現れた見知らぬ顔に、女はようやくそれだけ言うことができた。
「貴様達、何者だ」

兵士達は、動揺を隠すように、殊更、威圧的な口調で誰何した。

「ああ、実は、義勇兵の登録を済ませたのですが、仲間とはぐれてしまっています。少し行き違いがあったようです」

アリアディエールの声は、明快だった。

……よくも、まあ。

後について来たリヴェリーは、アリアディエールの演技振りに、感心していた。

「行き違いで済むか、刃傷沙汰になるとこだったのだぞ」

「誰も武器など抜いておりませんよ」

辺りを見回し、澄ました顔でアリアディエールは言った。

「問題無し、ですね」

「しかしだな……」

「あん、何か不満でも？」

リヴェリーは威圧するように、目を細めた。兵士達の反論を、リヴェリーは不発のまま、叩き伏せてしまった。

リヴェリーが放つ、純粹な殺気を感じ、兵士達はそれ以上何も言うことが出来なかった。

「では、これにて」

アリアディエールは悪戯っぽい笑みで言った。

何も言えなくなった兵士達を尻目に、アリアディエールは、女の腕を取ると速やかにその場を立ち去った。

役所から離れた、商店の立ち並ぶ通りの陰まで来たところで、アリアディエールは足を止めた。

「何なのだ、貴様は！」

女はアリアディエールの手を振り解くと、開口一番に叫んだ。

「あの兵士を切ってしまったら、牢にぶち込まれて、終わりだろうが」

リヴェリーは、欠伸混じりに言った。

女はリヴェリーを藍色の瞳で睨み付けたが、リヴェリーは肩をすくめただけだった。

「差し支えなければ、教えてくれないか。何故揉めていたのか」
アリアディエールは、諭すような口振りで問い掛けた。

「賞金目当ての、つまらぬ者達には許可をあたえ、私には、女だという理由だけで戦には出られぬと言う。それが、理不尽でならぬのだ」

苦々しく、女は言い捨てた。

「真に民の為を思い、剣を手にし、ここまで来たのに、何故こうまで、侮辱されねばならぬ！」

握りしめられた拳が、無念に震えていた。「速やかに乱を鎮めねば、力を持たぬ民が傷つくだけだというのに……」

女の言葉を黙ったまま聞いていた、アリアディエールは、かけるべき言葉を探していた。

行き場を失った、女の感情の矛先が、アリアディエールに向けられた。

「貴様達とて、その類ではないのか」

女の言葉に、嘲弄の響きがちらついていた。

「……何だと」

……まずいな。

アリアディエールの口調の変化に、リヴェリーは慌てた。

この手の侮辱とも取れる行為に、アリアディエールは決して寛容ではない。

一見優しげに見える表情をしているが、アリアディエールは、無制限に相手の無礼を許す事は決してなかった。理に合わぬことならば、相手が誰であろうと、争いも辞さないのである。この点においてアリアディエールは、アルフォンスやリヴェリーよりも、気が短かった。

「おい、嬢ちゃん。口が過ぎるぜ」

何か言いかけた、アリアディエールを遮るように、リヴェリーは二

人の間に割って入ると、殊更に凄みを聞かせた声で言った。「言うて良いことと、そうでないことがあるんだぜ」

アリアディエールは、リヴェリーの言葉の半分は、自分に向けられていることに気付いた。

アリアディエールは、努めて冷静に、だが力強く言う。

「私達は、速やかにこの乱を鎮め、民の穏やかな生活を取り戻したいだけだ。その思いに、一片の曇りもない」

アリアディエールは、真っ直ぐに女を見据えていた。

女の藍色の瞳が、一瞬だが中空をさまよった。

「自分一人が、国の将来を憂いているとは思わなくてくれ」
静かに言うと、アリアディエールは女の言葉を待った。

女の瞳が微かに、後悔の色を帯びた。

「すまなかった」

素直に、女は深々と頭を下げた。

「本来ならば礼を言わねばならぬのに、そなたに苛立ちをぶつけてしまった。無礼な言動をしてしまい、本当にすまない」

「いや、私こそ偉そうなことを言つてすまない」

頭を一つ振ると、アリアディエールは言った。

リヴェリーは、アリアディエールが激発しなかった事に、胸をなで下ろした。

数瞬の沈黙が流れた。

アリアディエールは、少し考えこんだ後、女に言った。

「もし良かったら、私達と一緒に行かないか？」

アリアディエールは、リヴェリーの顔を伺う。

「大將はあんただ。好きにすればいいさ。兄貴も、きっとそう言うに違いない」

リヴェリーは苦笑した。

「どうだろう、君さえ良ければだけど」

「理由を聞いても良いか？」

「同じ思いを抱いている者を、見捨ててはおけないよ」

アリアディエールの瞳に、曇りはなかった。

女は暫くの間俯いていたが、顔を上げると、決意のこもった眼差しを、アリアディエールに向けた。

「わかった。そなたについて行くことにしよう」

アリアディエールは笑顔で頷いた。

「まだ、名を名乗っていなかったな。私はアリアディエール、こちららは、リヴェリーだ。君は……」

「……シリューだ、宜しく頼む」

「ああ、こちらこそ」

アリアディエールが差し出した手を、シリューはためらいがちに握り返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3659f/>

霧降る国の戦記

2010年11月23日17時27分発行